



Aチーム
珠洲市大谷・高屋

Bチーム
珠洲市鉢ヶ崎

- 7月31日、晴れ☀️、今日も暑い。
- 7:30 **金沢駅に14人全員集合**。今回は珠洲市へ2台の車で2手に別れて支援。**Aチーム**は大谷・高屋へ6人(石川4人、東京1人、中央1人)マイクロバスで、**Bチーム**は鉢ヶ崎(石川4人、秋田1人、高知1人、中央2人)へ中型バスに乗り込む。金沢支部の2人が仕事前に早朝のお見送り。いってきま〜す!
- 7:50 能登里山海道を羽咋(はくい)へ。天気よく、青く広がる日本海に沿って北上。世界でも珍しい車で走れる砂浜「千里浜」なぎさドライブウェイを左手にみる。右手には風力発電の風車も。
- 8:20 **羽咋センター着**(能登半島地震被災者支援共同センター)。日本共産党が呼びかけ、新婦人、民医連、全労連、農民連などが参加して共同で運営。2台の車に、事前に要望を聞いて全国の募金で発注した、山のような支援物資を「届け先別」に積み込む。みんなテキパキと手際がいい。汗が噴き出す。
- 9:10 センター出発。Bチームのバスにはセンター事務局長の黒梅明さんが同乗し案内して下さることに。**Bチーム**は、能登里山海道が7月17日両面交通可となったとはいえ、各所で地震による段差が依然として大きく、これで復旧などとは言えない激しいアップダウンの現状をみてほしいとあえて悪路へ。**Aチーム**は目的地がさらに遠路ということもあり、七尾で下道に降り、富山湾・七尾湾ぞいに北上。この道も中央に穴がパッキリあいていたり、ガケ崩れや工事中なども。(以下、Aチームのみ報告)



マイクロバス内では、被災当時や現在の様子などを質問したりして交流。新婦人県本部副会長の近松さんは珠洲の高屋出身で今回の案内役。全体の状況や高屋の様子、原発のたたかい、子どもの頃のエピソードも話して下さる。

輪島と金沢を結ぶバスは有料となり(被災者も!)、運動でようやくボランティアだけは無料に。仮設住宅に当たっても、家のカギを渡したら支援は終わり、一切なし。義援金は5万円1回渡ったのみ。内灘は出ないなど線引きがされ、しかも申請しないとダメ。コロナの時は一気に届いたのに。インフラは、ほぼ復旧とされるが、電気はくるようになって、水道

は本管のみ。敷地内はこの非常時に自分でやれと。珠洲の大谷、高屋地区は、道も港も壊れて、やっと自衛隊の空からの救出となった。馬毛島など水も電気も全部やったのだから、もっとできるはず。原発があったら避難のしようがなかった。県は創造的復興というが、創造なんかなくていい。漁師は漁をしたい、農民は田畑を耕したい、それでいい。漁港を直し、田んぼを直したい。金沢の参加者からは「これまでの避難訓練は何だったのか」。先日は「避難の際は、必要なものを自分でもってくるように。避難所には何でもかんでもあるものではない」と説明された。イタリアや台湾のようなことがなぜできないのかと。国も県も住民おきざり、政治変えなきゃと。



9:50 七尾に入る。右手に富山湾側の七尾湾が。

左には壊れた家が目立つようになる。時には重機で解体中の家も。「壊れた家そのままつらい、でも解体して更地になったところを見るのもつらい」との被災者の声が紹介される。田んぼは田植えが済んで、緑の絨毯がひろがる、いい季節。田んぼの向こうにはガケ崩れの跡がいくつも。これからの雨で被害が広がらないように。「珠洲の千枚田はどうなっている？」と聞くと、近松さんは「7割方、田植えができた。それは農民もちろん、これまで来てくれていたボランティアが全国からかけつけた」と。奥能登に魅せられた人びとの蓄積した力がこれからの復興にも役立つのではと少し心に灯がともる。



11:00 穴水から珠洲へ。あちこちの仮設住宅が倉庫のように並ぶ。大きな家にいた人たちが狭いプレハブに入って、夏も冬も越すのは大変だろうなとひとしきり。珠洲への大谷(おおたに)トンネルはまだ通行できず、う回路へ。

11:50 大谷地区に入る。途中、物資をお届けする予定のYさん宅はお留守。お昼前、おにぎりを車中でほおぼる。

12:00 **大谷小中学校の避難所**に到着。予定(12:30)より早い。避難所の方に挨拶に行き、支援物資を降ろし始めると、避難所の方、運転手さんも手伝ってくださる。10人避難されていて、女性は4人。レイラがたくさんあったのでまわりの方にどうぞと。トイレは外につくられた仮設2つ。比較的きれいだが、仮設は不便だろうなと。ここは小学校と中学校あわせて生徒数は14人。近松さんはこの大谷中学校で学んだ。学校の隣に新しい仮設住宅を建設中で、これまで見たプレハブ風でなく、木が使われている模様。2階だてもできるとか。留守だったYさんが軽トラで駆けつけてきてくださる。避難所まで来れない人10人分の支援物資を渡す。Yさんは、仮設に入った人もクーラーの電気代も節約で避難所にきている。支援を打ち切られて生活が大変。でも、仮設待ちの人もいるので、なにかと遠慮したり、お互いに気づかいもある。「遠慮なく取りに来てほしい」と。避難所のそばも壊れた家、がけ崩れが。





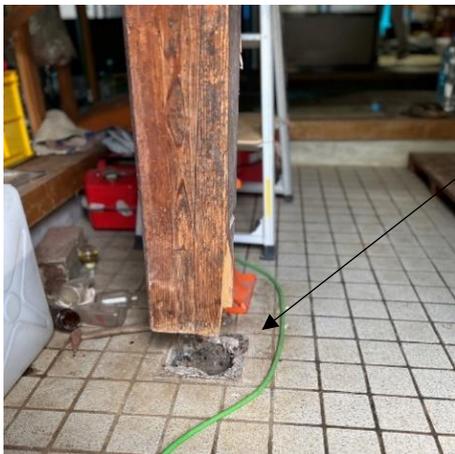
12:55 大谷出発、高屋へ向かう海岸線は、「子どもの頃、遊んだ砂浜や岩場だったが、地盤が隆起して岩場になった」と近松さん。**珠洲原発立地予定地**はあそこ指さす先に茶色の土が見える。この海から水を引こうとしていた。**地盤隆起のこの地で原発を止めたのは女性たち**。NHKの珠洲特集でも漁協の女性たちが座り込んで「原発つくるなら私らを車で轢いて」と決死のたたかいが紹介された。「調査をさせなかったことが決定的だった。取材された男性は私の同級生。私名義の土地があって、関西電力が金沢にいる私のところまで来て、土地を売れ、貸せとやってきたが、もちろん断った」と。「原発をつくらせなくてありがとう」と立場をこえて声をかけられるという。



13:05 **高屋の仮設住宅**。近松さんの同級生のお姉さん、まりちゃんがおでかけするところを引き止め、相談。「あの人はどうしている、この人はどうしてる」と話がはずむ。今後は？と聞くと、「本当いうと、毎日、ここに残ろうか、他に行こうか、揺れている。でもこの地にいたいね」と。私たち6人は、車からまりちゃんの部屋に支援物資を次つぎと積み上げ、テレビの部屋の半分を物資で占領。「こんなにたくさん。お米、そうめんも。ここは1人暮らしが多いけどまわりの人に配るね」と喜ばれる。



13:30 仮設住宅を出て、近松さんなじみの**井上商店**に立ち寄る。さすが地元、どこにも知り合いが。そこに先ほどのまりちゃんがやってくる。「かぼちゃ、もってきたから、あげる」と。地域の絆、温かい助け合い、つながりの強さを実感。「支援物資たくさんもらったから、明日、とりに来て」「お米もあるの？うれしい」と。能登特産の塩がみそづくりにいるからとっておいてねとの話も。



13:40 片付けを頼まれていたMさん宅に遅れてようやく到着。Mさんは1人暮らしの大工さん。自分で建てた家の部分も傾き、古い家の土台が壊れて柱が浮いている。震災後、3日ほど、家のなかの部屋で寝ようとしたが、怖くて寝られない。以来、ずっと車のなかで寝ている。水は自分でひいた。とにかく自分では片付かないからと。みんなで土足のまま、家のなかに入り、奥の1室をみんなでどんどんごみ袋に入れて片づける。思い出の写真などは残し、お母さんの新品の割烹着はいただく。「これからどうなさるんですか」「家は修復しようにもサッシだけでもお金が必要。仮設にあたったから、そこにいて、それからどうするか、まだ決められん」。



14:25 Mさん宅出発。Bチームと15:00に合流予定の場所へ。
 15:10 道の駅「すずなり」着。キリスト系団体の震災ボランティアの青年たち5、6人の姿も。遅れてBチームも到着。みんな陽に焼けて。珠洲の新しい会員さんとの感激の出会いも。短時間みんなで感想を出し合う。「心の折れそうななか、こんなにと喜ばれてよかった」「生ものものあるのうれしいといわれた」「物資渡しの場がおしゃべりの場になってよかった」「年金ぐらしの人は家を建て直すことなんてできない、公営住宅の運動しよう」「仮設トイレはマスクしても大変だった。なんとかならないのか。沖縄や馬毛島や万博なんてやるくらいなら、トイレぐらいなんとかしろといたい。政治を変えなきゃ」と。みんなみんな猛暑のなか、大奮闘しましたー！



15:45 予定よりやや遅れて羽咋センター行きと金沢駅行きに分かれて帰路へ。金沢行きマイクロはかつての能登線の廃線あとに並行した道を通りながら、また、7カ月も放置されたままの姿を見ながら、自民党による能登切り捨ての悪行をしみじみ。かつて北前船でにぎわい豊かな自然・文化が残る奥能登。鉄道敷設から、国鉄民営化で廃線、モータリゼーションへと国策そのまま。道路建設などの土木費は石川・富山がトップクラスという。原発建設を阻止し、どんな苦難にあってもこの土地を愛し、ここで生きようという人びとがいる。国力もある。「だれも見捨てない政治」をただの謳い文句にせず、政治を本気で変えねばの思いつつ。18:45 金沢駅につき、新幹線に飛び乗りました。羽咋センター到着のみなさんからも元気な写真が送られてきました。

♥みなさん、大変お疲れさまでした〜！♥ 次回は9月12日です。